東京大学大学院　工学系研究科　都市工学専攻
社会人のための修士課程｜都市持続再生学コース
Master's Program in Sustainable Urban Regeneration
東大まちづくり大学院
mps news No.19
2024.4.1
UTokyo

開講式：第17期生18名が入学

開講式の様子

2023年9月29日、記念すべき第17期生のための開講式およびガイダンスが執り行われました。今年は入試に合格した18名の新入生がまち大に加わりました。都市工学専攻・まちづくり大学院、社会基盤専攻、および建築学専攻を代表する教員からの祝辞をご紹介します。

お祝いのことば

入学おめでとうございます。高い倍率の大学院入試に合格されたので、自信をもって、学びにつなげていただきたいと思います。本コースの通称は東大まちづくり大学院と言われていますが、正式には都市持続再生学コースです。都市工学専攻の中に設置されているコースです。

まず、設立の経緯についてご紹介します。きっかけは都市の持続再生を研究するため、都市工学、社会基盤、建築学で共同で取り組む文科省のプロジェクトでした。2つのステージで合わせて8年行っていましたが、その研究成果をもとに都市の持続再生の専門性を持った人を育てていくことを目指し、本コースができました。

本コースの1つ目の特徴として、都市工学だけでなく、社会基盤学や建築学の先生に講義を担っていただいていることがあります。都市工学の教員ももちろん講義を持っていますが、社会基盤学や建築学や日中の講義も含めて、関心を広く持っていただきたいと思います。

2つ目の特徴としては、多くの非常勤の先生に支えられていることがあります。さまざまなまちづくり、都市の持続再生に関わる専門家に講義を提供いただいており、これは、世界的にも例のない充実した講義です。英語で提供されれば、世界中から受講生が集まる講義ではないかと考えています。なにより、非常にバラエティに富んだ先生の講義があります。まちづくり、再開発、ランドスケープデザインなどに実際に取り組んでいる先生方なので、ぜひ良い関係を築いてください。先生方が対面での講義を希望されているのは、みなさまと交流したいという意識からです。先生方と仲良くなることもこのコースのメリットかと思います。

3つ目の特徴は、都市持続再生学寄付講座という仕組みにあります。建設業、不動産、開発系の公的な銀行など、十数社のご協力を得て、それがバラエティのある非常勤の講師を招く原資となっています。寄付企業の方々とも、修了式の懇親会や公開講座で直接交流できる場があります。こうした方々も都市づくりや持続可能性に関わっていらっしゃるので、それぞれの専門性をお持ちです。このようなネットワークも広げて行ってください。本コースは、非常勤講師、都市工学、建築や社会基盤など学内の教員、寄付企業、OB・OGなどの先輩方とのネットワークを広げる場にもなっていて、それが一番の魅力かもしれません。一方で、この貴重な機会をどのような形で自分のものにするかはみなさんの学び方にあります。

まちづくりは一人ではできません。建築単体でもいろいろな方が関わっていますし、都市であれば、非常に多くの方と一緒に仕事をしなくてはなりません。いろいろな方と上手にコミュニケーションをとってください。真摯な態度で誠実に取り組むことで信頼を勝ち取ることが大切です。研究面の倫理性だけでなく、より幅広い面での非常に高い倫理性が求められます。もちろん、すでにそういった部分はお持ちかと思いますが、それをより高めていただき、職能人材として育ってくださることを期待しています。

都市工学専攻・まちづくり大学院
小泉　秀樹　教授
（専攻長・コース長兼任）

社会基盤学専攻
布施 孝志 教授
（専攻長）

入学おめでとうございます。入学生のみなさんは、実務に携わり、いろいろな問題に関わっている方々です。まちづくり大学院は、みなさんの携わる実務と大学の勉学を結びつける良い機会かと思います。大学は良くも悪くも自由なところです。固定観念にとらわれることなく、自由に学んでいただきたいと思います。

一つの問題をそれだけで見るのではなく、いろいろな見方をしてください。より抽象化して考える、問題を俯瞰してみるということが大切です。そういった点では、いろいろな専門性が役に立つかと思います。

知識、技術をネットワーク化して取り組みましょう。昨今、都市のあり方も大きく変わってきています。多くの課題がありますが、それらは一つの視点から解けるものではありません。

また、専門性、多様性も求められます。まちづくり大学院は、多様な講師陣がいらっしゃり、知識、技術が身につけられるところです。また、いろいろなつながりができるかと思います。そういった人のネットワークも大切にしてほしいと思います。

建築学専攻
山田 哲 教授
（専攻長）

入学おめでとうございます。建築という学問で考えると、建物は身近にあるもので、みなさんが知っているものを扱います。ただ、知っているつもりでも、実は表面的なもので、建物の空気の流れ、温度、安全性、見た目の良さなど、いろいろな点で考えてなくはなりません。

みなさんは、社会人経験があるため、そういった点はすでによくご存知かと思いますが、都市というのは、建物という点を集めて、人々の社会生活の大きな空間を扱うというもので、また近年では成熟化した都市をどう扱うかというメンテナンスに関心が移ってきています。従来の右肩上がりの経済成長の時とは違った新しい問題を解決する必要があり、いろいろな課題があります。

新しい引き出しを作り、経験を積み、今後よりよい社会を作っていく上でのご自身のステップアップの機会につなげていただきたいと思います。

開講式の様子
（上段）左：小泉先生　（下段）左：布施先生　右：山田先生

2023年度秋季学位授与式・よいまち会
16年間で修了生が215名に

2023年9月22日、東京大学秋季学位授与式及び学位記伝達式が行われました。2023年9月修了は、11期生1名、13期生2名、14期生4名、15期生5名の計12名が修了しました。2023年3月修了の9期生1名、13期生4名を合わせると17名となり、これまでの修了者は計215名となりました。

17名の修了生の論文題目は以下のとおりです。国内外における持続可能な都市地域づくり・まちづくりに関する、多種多様な修士論文が揃いました。学位授与式終了後は、15期生主催による謝恩会（よいまち会）が対面で開催されました。寄付企業の皆様にも多数ご参加頂き、交流を深めました。

謝恩会（よいまち会）での集い

まちづくり大学院生の修士論文

【2023年３月修了】
- ごみ有料化後のリバウンド現象の発現を抑制する要因分析
  —多摩地域２市におけるごみ有料化導入後のリバウンド現象を継続的に抑制する要因について—
- 市民向け復興まちづくりイメージトレーニング手法の開発と事前復興の課題検証
- レールバンク制度を用いた鉄道路線の自然歩道等への転換
  —米国サウスカロライナ州スワンプラビットトレイルを対象として—
- 保育施設の地域貢献に関する研究
  —コミュニティコーディネーターの役割に注目して—
- 自治体の分野別基本計画を統合する空間計画の策定手法 —草加市都市計画マスタープラン策定の事例分析—

【2023年９月修了】
- 再開発集積地の都市空間形成を誘導する地区プランの役割 —六本木・虎ノ門地区の地区プラン・個別再開発計画の分析—
- 東京区部における街並み誘導型地区計画の外部効果に関する考察
  —練馬区と板橋区の住居系用途地域に適用された単独施行型の３地区をケース・スタディとして—
- 再開発事業のプロセスにおけるエリアマネジメントの検討に関する研究
  —東京都江戸川区小岩地区と静岡市草薙地区のケーススタディ—
- 公立図書館のサードプレイス性保有に関する実態研究
- インパクトファイナンスのまちづくりへの活用可能性 —米国Environmental Impact Bond Bond（EIBEIB）の事例を通じて—
- 美食の街サンセバスチャンの戦略計画に関する研究 —その役割と有効となる仕組みに着目して—
- TNCs参入がアメリカの都市圏交通に与えた中期的影響の分析と日本への示唆
- 病児・病後児保育施設における施設特性を考慮した利用児童数の推計及び越境利用の圏域分析
  —東京都特別区及び多摩地域の病児・病後児保育事業を対象に—
- 観光地の再生過程における着地型観光コンテンツの開発と定着の促進要因に関する研究 —熱海市と函南町におけるケーススタディ—
- 共助推進に資するNPO支援施設の運営実態 —首都圏の施設を対象に—
- 東京都周辺の民間主導の交流施設を対象とした場づくりに関する研究 —運営実態の分析にもとづく地域への波及効果の検討—
- 調布駅付近連続立体交差事業がまちに与えた影響 —駅周辺店舗（施設）の立地や利用の状況分析より—

まちづくり大学院に入学して――志望動機と入学後の感想

2023年度入学の第17期のみなさんに、志望の動機や今後の抱負などを思い思いに語っていただきました。

■内藤克子―地方公務員

誰もが居心地よく、自らが望む形で社会に参加でき、多様な人々が混じり合うインクルーシブなまちを実現したく、鎌倉市で福祉行政に携わっています。大学院の充実したカリキュラムに学び、改めて福祉政策を捉え直すことで、地域福祉の方向性と都市計画を基盤とするまちづくりの方向性を一体的に整理する視点を得るとともに、ともすると限定された分野にとどまりがちな福祉のまちづくりをコミュニティ全体に展開するには何が必要かを明らかにしたく、入学を志望しました。

入学後は、属性も背景も志望動機も異なる同期に囲まれ、互いの強みを生かしながら、楽しく学んでいます。講義後にはディスカッションへの積極的な参加を求められ、自分の理解力やこれまでの経験をどう糧にしているかが常に試されます。普段は出会えないような先生方や同期たちの紡ぐ言葉は、時に、私の日常からかけ離れ、とても刺激的です。夢中で勉強できる幸せを噛み締めています。

■佐々木亮―経営コンサルタント

金融機関勤務の後、現在は中堅・中小企業向けの経営コンサルタントの仕事をしています。コンサルの現場においては対象企業の強み・弱みなどにフォーカスして戦略を練るのが一般的ですが、人口減少や国際化が進む中で、個々の企業単体ではなく、企業が属する「まち全体としてどのように発展していくか」という視点を持つことが、今後一層求められるのではないかと感じ志望しました。

文系出身のため基礎から学ぶことが多く、様々な講義に期待しています。現状の仕事に直結する部分で言えば、地域商店街とまちづくりとの関わりや、飲食店や小売店等の店舗ファサードについて専門的に学びたいと考えています。また、折角再度学びの場に身を置くことになったので、幅広い視野を持ち、大学が掲げる国際人材に近づくにはどうすべきかを日々考えながら精進していきたいです。

■鈴木重博―地方公務員

これまで、各行政計画の策定等、権限移譲、広域連携、市町村合併・政令指定都市移行などの業務に携わり、現在は、中央研修機関で全国の市町村職員を対象とした各分野の研修等を担当しています。日々の業務の中で、地域社会や人々の暮らしが大きく変化していることを実感しており、新たなアプローチを学ぶことで政策のプロとして地域に一層貢献したいと考え、まちづくり大学院の門を叩きました。

入学後、慌ただしくも非常に楽しく刺激的な日々を送っており、まちづくりに関連する各分野でトップクラスの先生方によるご指導や、多様なバックグランドを持つ同期の皆様との切磋琢磨を通じて、深い学びと自身の更なる成長を目指していきます。

■Y.H.―広告・マーケティング会社

業務でまちづくりや都市開発に携わる中で、体系的な学びと自分自身の問題意識を深めたく思い、進学を決めました。仕事だとどうしても近視眼的・現実的に考えがちですが、入学後は視野を広げてものを見る感覚をリハビリできています。先生方はもちろん、演習等で同期の方からも刺激を受けられるので、業務との両立は大変ではありますが、入学して良かったと感じています。

■平川宏―JFE 東日本ジーエス(株)

私は民間企業(製造業)で人事・労務の仕事を長くやっており、実務を理論化できないかと考え、社会人大学院で労働組合法の研究を行いました。一方、11年前に不動産分野に関わる会社に異動しました。そして、それなりに苦労して不動産鑑定士という資格を取得しましたが、なかなか実務で活用できていませんでした。そんな時、日本不動産学会のシンポジウムに出席したところ「都市再生と余剰容積率移転」がテーマとなっていました。「都市再生」ということであれば不動産鑑定を生かせるかもしれないと考え、まちづくり大学院に挑戦しました。

人事・労務の研究を修了した際はこれで勉強は打ち止めにしようと考えていましたが、最後の力を振り絞って再度やってみます。亀の歩みになろうかとは思いますが、人生はチャレンジ、ささやかですが「二刀流」をやってみます。

■H.K.―地方公務員

大学の学部では主に行政学の観点から政策・まちづくりを学んでいました。元々公務員を志望していたため大学卒業後すぐに就職しましたが、研究への未練を捨てきれずにいたところ、ゼミの教授にまち大を勧められ入学しました。

入学してからは、国内最高峰の先生方の講義を拝聴することができ、刺激的な毎日を過ごしています。また、演習や授業外の時間で同期の皆様と意見交換をする中で、いつも新しい知見をいただいています。経験豊富な皆様に囲まれ、自分が同期であることが本当に恐れ多いです。得られるものは全て吸収するという意気込みでまち大での生活を送り、得たものを自分の研究や今後のキャリアに還元していきたいと思います。

■藤平貴範―地方公務員

都市の生活者として日々過ごす中で、都市の消費者でなく、創造する知識や実践する力を身につけたいと思ったことが志望動機の一つです。社会情勢や技術の変化するスピードは想像以上で、大学生活を通じて自分の軸となる「何か」を見つけ、多角的に物事を考える力を高めたいです。また東京大学という場の持つアカデミックな風土は学業をするには最適な場所と感じています。演習で初めて訪れた下北沢では、チームごとに現状課題を考え、未来に向けて提案するプロセスを苦しみながらも前向きに取り組んでいます。

学業、仕事、家庭と三刀流の生活を過ごす中、体力不足を感じる今日この頃。午前中は家族と畑で大根の収穫をしてから、午後は本郷キャンパンスで演習に取り組んだ日もありました。学業を専念することに協力してくれている家族に心から感謝しています。

■米森健太―コンサルティング

「地域や社会が抱える課題を官と民が連携して解決し、人々が安心し、信頼し合って暮らすことのできる持続可能な社会の実現」を目指し、主に我が国の中央省庁や地方公共団体向けに、地域・社会の価値を高める地域活性化の取組や、地域・社会の運営の効率性を高めるスマートシティ等の取組を推進してきました。公認会計士というバックグラウンドから、これまでは経営・会計的な観点で上記テーマに触れてきましたが、都市工学的な観点を身に付け、まちづくりに関する総合力な知識・実力を持った専門家になりたいと考え、まち大を志望しました。今後のまちづくりのあり方について楽しみながら考察していきたいと思います。

■Y.O.―総合デベロッパー、弁護士

私はデベロッパーで法務部門のマネージャーをしています。プロジェクトのスキームや契約を法的にアドバイスするのが私の仕事です。実務の傍ら、私は都市問題に関心があり、法学(都市法)の分野で学位を取得したのですが、この分野の面白さにはまり、もう少し学びを続けたいと考え、本学に入学しました。いま、その選択は正解だったと確信しています。

講義してくださる先生方は、都市問題の分野のオールスターで、そんな先生方のお話を聞いたうえで、直接、質問できることは魅力の一つです。また同期のメンバーも多士済々で、その言葉も大切な学びになっています。演習などを通して実践の場が設けられているのも、このまち大の凄いところです。

都市計画は、空間を使って課題を解決する社会技術だと学びました。法律も課題を解決するツールという点で共通しています。法的に、空間的にと都市問題を解決するツールを増やし、広い視点から都市の課題の解決策を提案できる法律家を目指したいと思います。

■大石弘―建築設計事務所

建築設計業務に20年以上携わる中で、近隣地域との連携や周辺環境との関わり方、景観的な街並みとの調和等、建物単体では、解決しきれない課題に直面することが、多くありました。そのため、独学で都市計画的な手法による解決策や、他の事例等を参照しながら対応してきました。

しかし、改めて都市計画・まちづくりという分野についての学術的な考え方を専門的な研究を続けられている先生方から、直接学びたいという思いが強くなり、この東大まちづくり大学院への入学を選択しました。

現在、受講が始まっていますが、私が知りたかった実務に直接結びつくような内容も多く、日々、期待感を持って授業を受けています。

今後は、もともと興味のあるスマートシティの分野を更に掘り下げ、研究していきたいと考えています。

■T.S.―リノベーション会社

現在リノベーション会社において事業開発を担当しています。リノベーションを切り口に建築/金融/不動産×テクノロジー×サステナビリティ領域で実務に携わって来ましたが、英文コース名でもあるSustainable Urban Regenerationは非常に広範かつ重層的であるため、多様な視点・視座を獲得したく入学しました。

海外のMid-Career向けのPart-time Master等も検討しましたが、本コースは最大4年の長期履修制度もあり業務とのバランスが取りやすく、またクラスからのtakeawayを業務で即活用できるサイクルができており非常に良い選択肢であったと感じています。

このような機会に感謝しクラス/コミュニティへ貢献をすると共に、自身の研究テーマを深耕しインパクトある成果物に繋げていきたいと考えています。

大学構内キャンパスの古市公威像(工学部前)

■坂井涼―個人事業

化学製品と住宅事業を併せ持ったメーカーで働いてきましたが、かねてより関心のあったまちづくり領域に専門性を身に着けつつ飛び込みたいと、まちづくり大学院の受験を決めました。現在はメーカーを退職し、暮らしている地域のまちづくりに資する事業を立ち上げようとしています。

まちづくりという言葉が意味する対象は非常に幅広いと感じます。まちづくり大学院では、都市計画や政策などのマクロな視点に加え、民間レベルで展開されているミクロなまちづくり活動も含めて、学術的に捉えながら体系的に学ぶことができます。また、都市工学的な研究アプローチについても基礎から学ぶことができ、文系出身である私にとってとても学びの多い日々を過ごしています。

授業だけでなく職業や年齢も異なる多様なバックグラウンドを持つ同期からもらう刺激も、また大きなものです。意志次第で研究と実践の両輪を同時に回しながら成長できる環境だと感じています。

■熊谷智之―不動産管理

ライフサイエンス関係企業が入居しているサイエンスパークにてファシリティマネジメント業務を行っています。

管理している施設近傍に鉄道駅新設とそれに伴う再開発の計画があるため、再開発と施設の関係を深く考える必要が生じてきました。また、私自身が新駅付近の近隣住民でもあることから再開発に伴うまちづくりに関わりたいと考えていました。しかし、現在の自分には、まちづくりに関わっていく知識が足りず、学びなおしが必要と考える中で、まちづくり大学院を知り、こちらで学ぶことにしました。

仕事をしながら大学院に通うことは、想像していたよりも大変なことだと今更ながら実感していますが、各分野の最先端でご活躍されている先生方の講義や、様々なバックグラウンドを持つ同期と行う演習を通じて、これまでにない学びを得られていると日々実感しています。

■秋本康治―一般社団法人地域デザインセンター

私はこれまで、沖縄県南城市という人口 45,000人ほどの市でまちづくりのコーディネーターを務めてきました。

中小都市でまちづくりの仕事をしてきた中で、一般的に論じられるまちづくりの事例と中小都市の現場で起きていることのギャップを感じることもあり、まちづくり大学院での学びや多様な人たちとの出会いやディスカッションを通じて、都市の課題解決のための視点や考え方などの中小都市へ向けてのローカライズについて探求したいと考えています。

大学院での学びの時間を通じて、多くの人と会い、沢山の情報や取り組みに触れて、新たな視野が広がっていくことを既に実感しています。これからの学びの時間がとても楽しみです。

■波多野政俊―自営業

私は、東京の郊外武蔵村山市にて不動産賃貸業ならびに旅行業を営む傍ら、平成 25年度より市のまちづくり審議会委員を務めて参りました。また、モノレール延伸を見据え施工されている都市核地区区画整理事業地内において、令和3年よりまちづくり準備会を立ち上げ活動しています。

まちづくりは、その方向性を地域住民、行政、様々な関係者が協働に基づいて共創していくことが大切であると考えており、「まち大」にて多面的な知識を学び、多様な知見を吸収することによって、市民と行政のまちづくりに対する隔たりをなくし、同じ方向性のベクトルに近づけることにより、その将来像実現に向けて努力して参ります。

「まち大」では、講義内容、先生方、そして同期のみなさまが、みな魅力的で、貴重な時間をかみしめながら過ごしております。

■河野優子―テレビ局

学部生の頃より、まち大のカリキュラムに関心を持っておりました。様々な実務を経験しながらも、改めて建築や都市を見つめ、多様なバックグラウンドを持つ学生の皆様と互いに議論することができる環境に大きな期待感を持っています。日々の授業や演習を通して、まちづくりに関わる多様な要素に圧倒されるばかりですが、引き続きまち大生としてしっかりと研鑽し、研究を進められるよう努めてまいりたいと思います。

正門からも溢れる黄金のイチョウ

歴史ある赤門、1827（文政10）年建造

■神長侑磨―建設会社（ゼネコン）

現職は建設会社（ゼネコン）の研究所で、建築物の温熱快適性及び省エネルギー性能に関する研究に従事しています。地球温暖化やヒートアイランド現象が進行する中、都市の暑熱環境の悪化は一層深刻な問題となっており、カーボンニュートラルへの取り組みが多岐にわたる領域で求められています。このような状況下、建設業においても、単に建築物の範囲に留まらず、都市全体の温熱環境改善と脱炭素化を目指した研究の必要性を強く感じ、より実践的な計画手法と新たな研究の視点を身につけるため、まちづくり大学院への進学を決意しました。

大学院に入学してからは、職務、講義、課題、そして私生活とのバランスに奮闘しつつ、第一線で活躍する先生方や、多様な才能を持つ同期の方々との刺激的な交流を通じて、学びを深めています。忙しい日々に初心を忘れず、入学を理解し協力頂いている会社に感謝し、学びを社会に還元できるよう、楽しく学んでいく所存です。

■S.O.―民間シンクタンク

これまで私は、「日本を含むアジアをフィールドに、持続可能な次世代の都市空間の計画、デザインとマネジメントを通じ、社会や人々の課題を解決すること」を 1つのゴールに掲げ、現在の会社に入社しました。幸運なことに、大学・大学院では、社会科学や文学をやってきた自分でも、中央省庁や自治体、民間事業者を顧客として、都市に関わる様々なテーマのコンサルティング業務の経験を積ませていただくことができました。

しかし、私の知識や能力は、現場での先輩の指導の下、ほぼ実務と独学で身につけて来たことから、振り返ってみると、果たして「都市やまちの本質的な問題を解決し得る解」を提示することができているのか。重要な問いに回答することができているのか、課題を感じるとともに、コンサルティング実務の積み重ねだけで、自分の掲げたゴールに邁進することに限界を感じるようになりました。

このため、自分なりの都市・まちづくり知の土台を築くとともに、十分な視座と視野、的確な手法とエビデンスの積み上げから、現実の都市やまちの課題を解決する基礎力を習得すべく、まちづくり大学院を志望しました。

仕事と大学の両立は、開講から 2ヶ月余りですでになかなかハードですが、なんとか時間を作りながら、初心を忘れず、楽しく学んでいけたらと思います。

mps

■第17期生のプロフィール
人数：18名
年齢：25～65歳（平均40歳）
性別：男性16名、女性2名

まち大生のまちづくり

まち大では、既存の取り組みを批判的・客観的に捉える視点をもち、それを新たなまちづくりの展開に活かすための実践的な教育・研究を行っています。実際のまちづくりと連動した演習など、在学中の実践的な教育プログラムのほか、修了生もまち大在学中の経験と人的ネットワークを活かし、続々と新しい取り組みを行っています。ここでは、その一端をご紹介します。

日常生活圏におけるリジェネラティブ・デザイン・スタジオ

2023年度のまちづくり演習第1（A1ターム）では、「日常生活圏におけるリジェネラティブ・デザイン・スタジオ」と題して、下北沢駅周辺を対象に「2050年を見据えたリジェネラティブなまちを実現するまちづくり事業」に取り組みました。「リジェネラティブ・デザイン」とは、グローバルな環境問題の解決とローカルな社会・経済問題の同時解決を目指すデザインです。

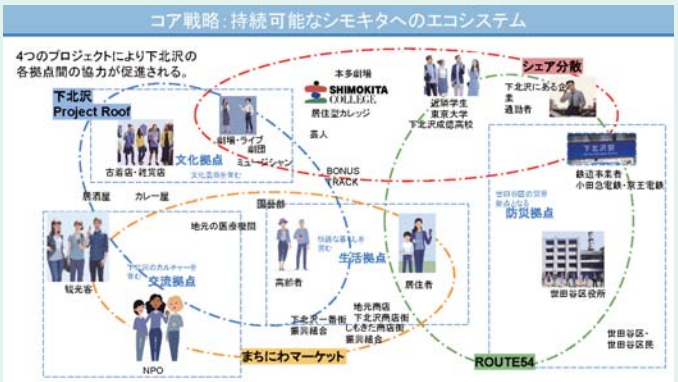
GX（Green Transformation）は日本のみならず世界の目標となっていますが、地域の課題解決なくしては、かえって格差や排除が進んでしまう恐れがあります。この演習では、4～5名でチームを組み、循環経済、自然再興、社会的包摂、防災の4テーマの相乗効果が現れる提案を検討しました。この演習で求められているのは、相互に関連し合うテーマを扱って、空間デザイン（ハード）とそれを実現・継続させる仕組み（ソフト）を提案する総合力です。学生たちは、生成AI（midjourny）を用いて、複合的なテーマを実現する提案を具体的な空間イメージにするとともに、その背後にある担い手像や事業スキームのダイアグラム化や定量的な試算を行うことで、それぞれ充実した提案となりました。

担当教員：中島弘貴・須永和久

■A班最終発表

■C班最終発表

■B班最終発表



■D班最終発表

太陽光発電の立地とその傾向を国土・地域・地区スケールで研究

■長野県茅野市（研究対象地）における太陽光発電の風景（提供:筆者）

シンクタンクで再生可能エネルギーの調査研究・コンサルティングに携わっている中で、再生可能エネルギーと都市計画との関係性を学びたいという気持ちから、東大まちづくり大学院（まち大）で学んだ。まち大での授業・研究は楽しく、修士号のみならず、進学して博士号を取得した。

修士・博士研究を通じて、太陽光発電の立地とその傾向を国土・地域・地区スケールで研究した。実務においては、再生可能エネルギーの立地を議論するに当たって、大学で得た学びを直接的に活かして、都市計画を理解した上で分析を行っている。研究対象の太陽光発電だけでなく、洋上風力発電等の仕事であっても、大学で得た経験が間接的に役立っていると感じている。まち大で幅広いテーマの授業や演習を受講することにより、エネルギーにとどまらないまちづくりの視点を学び、先生方、同期や先輩後輩と交流する中で、一企業に勤めるだけでは得られなかった視点を得ることができた。

博士号の取得後も、職場の理解があったことで、研究を進め、学会で発表している他、大学での非常勤講師や自治体の審議会委員として活動している。大学で学んだことを活かして、産学官連携に貢献できる人材になりたい。　岡澤由季（シンクタンク）

イブニングセミナー2023「脱炭素まちづくり」

「カーボンニュートラルな社会」に向けて、ハイブリッド・セミナーで議論！

2023年5月8日（月）、「脱炭素まちづくり：カーボンニュートラルな社会に向けて」と題したイブニングセミナーを工学部14号館141講義室とオンラインのハイブリッドで開催し、約350人の皆さまにご参加頂きました。日本でもIPCC第6次評価報告書などを受けて2050年カーボンニュートラルに向けた企業や行政の取り組みが本格化する中、今後、まちづくりとしてどのようにこの課題に取り組むべきか、幅広い議論を行いました。

セミナーの前半では、佐々木正人様（竹中工務店取締役執行役員社長）に同社が描く「建築・まちづくりにおけるライフサイクルCO_2ゼロへの設計図」と題した基調講演を頂きました。後半には、東京大学の浅見泰司教授、小林光客員教授、小泉秀樹教授も加わり、村山顕人准教授の進行の下、企業・大学・行政による脱炭素まちづくりの取り組みとそれらの学術としての体系化について議論しました。

なお、東大まちづくり大学院では2023年度に「脱炭素論」という講義が新設されています。

最先端の情報を持つ識者が登壇

東大まちづくり大学院・公開講座「都市・地域政策の構想と展開」

首長・経験者をお招きして全４回開催しました。

まちづくり大学院の講義「都市地域政策の構想と展開」は、国の省庁や自治体のトップおよびその経験者が、都市・地域政策の着想や展開について語るシリーズ講義です。2023年6 ～ 7月に、増田寛也日本郵政（株）社長（元総務大臣・岩手県知事）、森民夫元長岡市長・元全国市長会長、守屋輝彦小田原市長（まちづくり大学院2010年9月修了）、本村賢太郎相模原市長に、それぞれの日程でご登壇頂き、公開講座をハイブリッド形式で（本学大学院生は原則対面で、外部参加者はオンラインで）開催しました。

2024年のイブニングセミナー（公開講義）について

2024年のイブニングセミナーとして以下を開催予定です。

日　　時：4/8(月)19:00～20:30　オンライン開催

開催形式：ハイブリッド形式（工学部14号館141講義室＋Zoom）

趣　　旨：現代社会では、GX・DXといった様々な変革(transformation)が目指されています。そうした変革を推し進める中で経済・社会的な格差を拡大させない公正な移行の実現が同時に求められています。本セミナーでは、谷山智彦氏によるGX・DXの昨今の動向、諸富徹氏による様々な変革を目指す前提となった新しい経済・社会のあり方についての講演の後、変革と公正を実現するこれからの都市再生のあり方について、幅広い議論をしたいと思います。

プログラム：講演「DX・GXに関わる昨今の動向」(仮題)
　谷山智彦（株式会社野村総合研究所 未来創発センター デジタルアセット研究室長）
　講演「公正な移行を実現する新しい経済・社会」(仮題)
　諸富徹（京都大学大学院経済学研究科 教授）
　ディスカッション「変革と公正を実現するこれかの都市再生」
　登壇予定者：小泉秀樹・瀬田史彦・中島弘貴　ほか

※お申し込み方法など、詳しくは決まり次第、まちづくり大学院ウェブサイトに掲載します。

2024年度　東大まちづくり大学院入試情報

2024年度の入学試験を右記のように行います。
募集要項の確認方法など詳しくは、東大まちづくり大学院のホームページをご覧ください。

募集要項・入学志望者案内Web公開日　4月上旬
説 明 会：4月15日（月）19:00～ ※オンライン
出願時期：5月17日（金）～23日（木）15:00
入学試験：6月22日（土）
入 学 式：10月　1日（火）

http://www.due.t.u-tokyo.ac.jp/mps/

■発行：東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻　都市持続再生学コース・同寄付講座　〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1　TEL. 03-5841-8362
■office@mps.t.u-tokyo.ac.jp ■http://www.due.t.u-tokyo.ac.jp/mps/